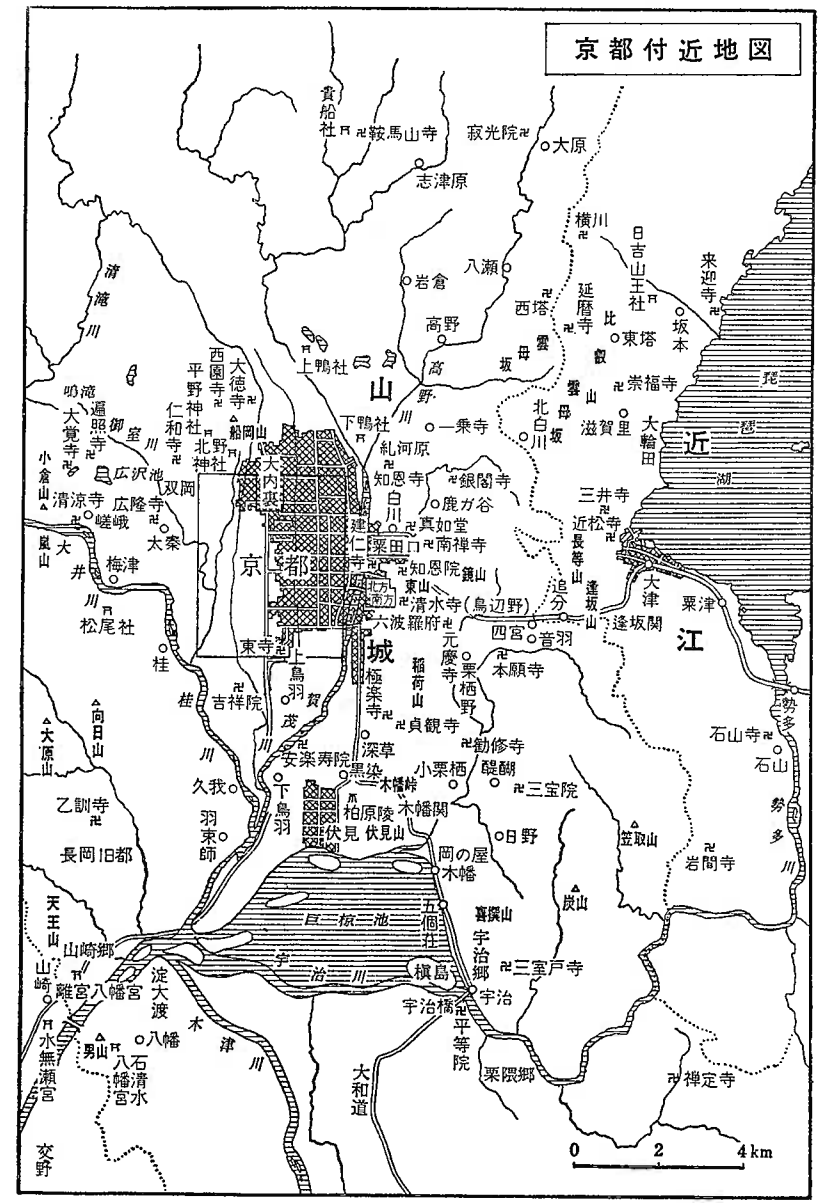

はしがき

一　本書は、基礎から完成まで、ということを目標にして編集しました。

二　本文は日本古典文学大系『土左日記　かげろふ日記　和泉式部日記　更級日記』によりました。ただし、句読点や漢字・かなの表記については若干わかりやすいように改めました。

三　抄出にあたっては、作者の生涯のあり方ができるだけたどれるように配慮しました。そして、大きなまとまりごとに章を設け、章の中を適宜の段（節）に分けました。

四　脚注は、辞書を引く習慣をつけさせるため、固有名詞や特殊な語句に限りました。また［重要語句］の欄を設けて、学習のまとめの一助としました。

五　〔研究〕については次の点に留意しました。(1)語意・部分訳・語法・文脈・内容探求・鑑賞等の全般にわたり、かたよらぬよう配慮しました。(2)解答の揺れるような問はできるだけ避け、そのおそれのある場合は、問い方にじゅうぶん留意しました。(3)高度な問には、指導上の便宜を考え、※印を付しました。(4)記述式の問では、解答者を不当に拘束することを避けるため、「約何字」のような字数の示し方をしました。また［解答欄］を下欄に設けて学習の便を図りました。

要抄 更級日記

目次

解説……四

一 かどで

(一) あづまぢの道のはてよりも……七
(二) かどでしたる所は……九
(三) そのつとめて、そこをたちて……一〇

二 竹芝寺

(一) 今は武蔵の国になりぬ……一三
(二) 野山、芦荻の中を分くるより……一五

三 足柄山

(一) 足柄山といふは、四、五日かねて……一八
(二) まだ暁より足柄を越ゆ……二〇

四 富士の山

(一) 富士の山はこの国なり……二二
(二) 富士川といふは、富士の山より……二三
(三) ぬまじりといふ所も……二五
(四) 粟津にとどまりて、しはすの二日……二五

五 梅の立ち枝

(一) ひろびろと荒れたる所の……二七
(二) 継母なりし人は、宮仕へせしが……二八
(三) その春、世の中いみじう……三〇

六 物語

(一) かくのみ思ひくんじたるを……三一
(二) いと口をしく思ひなげかるるに……三三

七 姉なる人

(一) 花の咲き散るをりごとに……三五
(二) その十三日の夜、月いみじく……三八
(三) そのかへる年、四月の……四〇
(四) その五月のついたちに……四一

八 東山なる所

(一) 四月つごもりがた……四三
(二) 京にかへり出づるに……四四

九 子忍びの森

(一) かやうに、そこはかなきことを……四五
(二) 親、となりなば……四六
(三) 七月十三日に下る……四八
(四) 八月ばかりに太秦にこもるに……五〇
(五) あづまより人来たり……五一

一〇 鏡の影

(一) かうてつれづれとながむるに……五三
(二) 母、一尺の鏡を鋳させて……五四
(三) あづまに下りし親……五六
(四) 東は野のはるばるとあるに……五七

一一 宮仕へ

(一) 十月になりて京にうつろふ……五九
(二) まづ一夜まゐる……六〇
(三) 十日ばかりありてまかでたれば……六二
(四) 十二月二十五日、宮の御仏名に……六三
(五) かうたち出でぬとならば……六四

一二 春秋のさだめ

(一) 上達部・殿上人などに……六五
(二) 春秋の事などいひて……六七
(三) 冬の夜の月は、昔より……七〇
(四) 春ごろのどやかなる夕つかた……七二

一三 物詣で

(一) 今は、昔のよしなし心も……七四
(二) そのかへる年の十月二十五日……七六
(三) 道、顕証ならぬさきにと……七八
(四) つとめてそこをたちて……八〇

一四 夫の死

(一) 世の中にとにかくに……八二
(二) 二十七日に下るに……八三
(三) 九月二十五日よりわづらひ出でて……八四
(四) 昔より、よしなき物語……八六

一五 後の頼み

(一) さすがに命はうきにも絶えず……八七
(二) 甥どもなど、一所にて……八九
(三) 年月は過ぎかはりゆけど……九〇

解　説

一　作者

作者は菅原孝標の娘であるが、その実名は明らかでない。生家は学問の家柄として知られ、孝標の五代前の菅原道真は、宇多・醍醐の両朝に仕えて、右大臣に昇り、政治上にも功績のあった大学者で、後世天満天神として祭られ、今日まで学問の神とあがめられているほどの人物である。その子孫は代々朝廷の大学頭または文章博士に任ぜられた。孝標は学才乏しく、地方官で一生を終えたが、その子すなわち作者の兄の定義は、再び大学頭と文章博士とを兼ねる地位に昇った。

作者の母の実家は歌人の家系で、母の父は歌人藤原倫寧で、母の兄の長能も聞こえた歌人であった。そして長能の妹すなわち作者の伯母は、右大将道綱の母で、日記文学の代表的作品たる『蜻蛉日記』の作者である。また、作者に多大な感化を与えた継母も、上総大輔と呼ばれた歌人であり、継母の叔父の高階成章の妻は、紫式部の娘の大弐三位であった。このように、作者は家系から見ても、家庭環境から見ても、学問・文芸に縁が深く、すぐれた作品を書いたことも偶然ではない。

作者が生まれたのは、寛弘五年(一〇〇八)で、このころは、藤原道長が栄華をきわめた平安文化の絶頂期に当たり、『源氏物語』をはじめ、女性作家の手になる文学が空前の開花を誇った時代であった。少女時代はこういう時代の中に育ったが、二十歳になった年には道長が没し、平安文化も衰退のきざしを見せ始める。そしてそれに伴うような形で、作者も憂苦の体験を積むようになっていく。三十歳を過ぎるまで、老いた父母のもとで家庭にひきこもってばかりいた内気な彼女には、はなやいだ事は何一つ訪れなかった。ようやく三十二歳になった年に、後

朱雀天皇の皇女祐子内親王のもとに宮仕えに出たが、それも長く続かなかった。まもなく地方官だった橘俊通の後妻になって、その間に仲俊等の子供をもうけ、安らかな家庭生活にはいったが、五十一歳の年に夫に先だたれ、その後は寂しい晩年を過ごした。没年その他は不明である。

二　内容

この日記は日々の記録ではなくて、作者が晩年に、それまでの約五十年にわたる自分の過ぎ来し方を回顧して、その思い出を書いたものである。思い出であるから、物語のように構想を練ったのではなく、強く印象に残っていることをたどって書き綴ったものであるが、そこにはおのずから大きな段落ができている。それはだいたい次のように考えられる。

(一)上京の旅（十三歳の秋から冬）

(二)物語時代（十三歳の末から十七歳の初めまで）　物語に読みふけった浪漫時代。継母の離別や、乳母や姉の死にあう。

(三)抒情時代（十七歳の夏から三十二歳まで）　和歌の贈答が多い。父の赴任などあり、後半には見た夢のことがしばしば語られる。

(四)宮仕え時代（三十二歳から三十七歳まで）　次の結婚時代とだいぶ重なる。源資通との淡く美しい交渉があった。

(五)結婚時代（三十三歳から五十一歳まで）　家庭の幸福を祈願して、物詣での旅をしきりにする。

(六)晩年（五十一歳から五十三歳ごろまで）　孤独の寂しさをかこつ。

以上のような内容であるが、全編を通じて読むとき、この作品がわれわれに訴えかけてくるのはどんなことであろうか。ここに描かれたのは、ある一つの時代を生きたひとりの女性の生涯である。この人は、少女時代から

物語にあこがれてその世界に自分を置いてみるような、浪漫的な夢を強く抱く性情であるが、やがてしだいにきびしい現実に直面してゆかざるをえなくなり、夢はことごとく裏切られる。晩年の孤独な暗い境涯の中で、若い日にあまりに夢みがちだったのがいけなかったのか、信仰に不熱心だったため悪い報いをうけたのかと自ら問い、自ら悔やみ、そうした自分を悲しみながら、けっきょくは信仰に最後の頼みをかけ、あきらめの中に自己を埋没させていこうとしている。そういう、いかにも平安中期の末ごろらしい、多感でいながら、寂しい静かな女性の姿と心がわれわれの魂を打つのである。

三　書名　この日記の末尾に近く、晩年の作者が、甥のひとりが訪ねてくれたのに対して、「月も出でで闇に暮れたる姨捨に何とてこよひたづね来つらむ」という歌をよんだことが書かれているが（八九ページ）、この歌は、『古今集』の「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」という歌によって、昔、姨（老女）を捨てたという姨捨山は月の名所であるが、全く孤独なこの自分は、月も照らぬ真暗な姨捨山に捨てられた老女にも等しいと、自ら観じたものである。姨捨山は信濃（長野県）の更級の里にあるので、『姨捨の日記』とあらわにいうのを避けて、『更級の日記』といったのであろう。

四　書誌　『更級日記』が書かれておよそ百七十年たってから、歌人として有名な藤原定家がこれを書き写した。これが現存する最も古い写本で、現在帝室御物になっている。この本は、いつの時代か修理をした際、紙の順序を間違えたまま綴じられてしまった。後世それを原本として書写したために、非常に読みにくいものとなっていた。大正十三年に、佐々木信綱・玉井幸助の両博士が、その定家自筆の御物本を精査して、綴じ誤りのあることを発見し、これによって正しい形にかえされて、読みよいものになった。それらはすべて玉井博士の『更級日記錯簡考』に詳しく述べられている。

一かどで

【一】 あづまぢの道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふもののあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、よひゐなどに、姉・継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光る源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏をつくりて、手あらひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとくあげたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ。」と身をすてて額をつき、祈り申すほどに、十三になる年、のぼらむとて、九月三日かどでして、いまたちといふ所にうつる。

年ごろ遊びなれつるところを、あらはにこぼち散らして、たちさわぎて、日の入りぎはの、いとすごくきりわたりたるに、車に乗るとて

あづまぢの……なほ奥つかた　東海道の終点（常陸）よりももっと奥の方にある国。作者の父菅原孝標の任国上総（千葉県中部）をさす。『古今和歌六帖』「あづまぢの道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな」による。

等身に　自分の身長と同じたけに。

薬師仏　人間の現世における願いをかなえ、病をなおすとされる仏で、広く信仰された。

九月三日　寛仁四年（一〇二〇）。

かどで　旅行のため家を出ること。当時は、吉日を選んで家を出、付近の家に数日とまり、つごうのよい日に本式に出発する風習だった。

いまたち　今のどこか不明。

車　ここは手車。

うち見やりたれば、人まにはまゐりつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見すて奉る悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。

〔研　究〕

一　次の傍線の主語は、それぞれだれか。

(1)　ところどころ語るを聞くに　(2)　そらにいかでかおぼえ語らむ

二　(A)(B)それぞれの傍線をつけた語の意味の違いを言え。

(A)　(1)　わが思ふままに　(2)　心もとなきままに

(B)　(1)　いかで見ばや　(2)　いかでかおぼえ語らむ

三　左の「なる」は、それぞれ、断定・推定・伝聞・詠嘆のうち、どの意味にとったらよいか。また、その他の語があったら品詞名を言え。

(1)　物語といふもののあんなるを、

(2)　物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ。

(3)　十三になる年、

四　この冒頭の部分で、作者はどんな態度で、自分のことを語ろうとしているか。（七〇字前後で答えよ。）

五　この一節で特に強く述べられているのは、主人公のどんな性格か。（二〇字以内で答えよ。）

重要語句
○あやし　◎あんなるを　○いかで　◎見ばや　◎思ひつつ　○ゆかし　○いとど　○そらに　○いかでか　○いみじ　○心もとなし　○さぶらふなる　○かどで　○すごし　◎見すて奉る　◎うち泣かれぬ

解答欄

【二】　かどでしたる所は、めぐりなどもなくて、かりそめのかや屋の、しとみなどもなし。簾かけ、幕など引きたり。南ははるかに野の方見やらる。東西は海近くて、いとおもしろし。夕霧たちわたりて、いみじうをかしければ、朝寝などもせず、かたがた見つつ、ここをたちなむこともあはれに悲しきに、同じ月の十五日、雨かきくらし降るに、境を出でて、しもつさの国のいかたといふ所にとまりぬ。庵なども浮きぬばかりに雨降りなどすれば、おそろしくていも寝られず。野中に岡だちたる所に、ただ木ぞ三つ立てる。その日は、雨にぬれたる物どもほし、国にたちおくれたる人々待つとて、そこに日をくらしつ。

〔研　究〕

一　左の傍線をつけた「る」「らる」について、その文法上の意義と、この場合に用いられている活用形の名称とをそれぞれ書け。

(1)　人知れずうち泣かれぬ。（前段）　(2)　はるかに野の方見やらる。

(3)　おそろしくていも寝られず。

二　左の傍線をつけた「に」を説明せよ。

(1)　いとすごくきりわたりたるに（前段）

めぐり　家の周囲にめぐらしてある垣や塀などの類。

しとみ　風雨を防ぎ、日よけをするための戸。細い木を縦横に組んで格子にした戸の片面に板を張ったもの。

境　国境。ここは上総の国と下総の国との国境。

しもつさ　「下つ総」の略。今の千葉県の北部と茨城県の一部。

いかた　今の千葉市、寒川辺一帯の古称か。古く池田郷の名があった。

国に　国府に残って。

重要語句
○かりそめ　○しとみ　○おもしろし　○をかし　○あはれなり　●浮きぬばかりに

解答欄

(2)　ここをたちなむこともあはれに悲しきに

(3)　雨かきくらし降るに　　(4)　庵なども浮きぬばかりに

(5)　野中に岡だちたる所に

三　「かりそめのかや屋の」の二つの「の」を区別して説明せよ。

四　「浮きぬばかりに」の「ぬ」を説明せよ。

【三】　そのつとめて、そこをたちて、しもつさの国と武蔵との境にてあるふとゐ川といふがかみの瀬、まつさとのわたりの津にとまりて、夜ひとよ、舟にてかつがつ物など渡す。

乳母なる人は、男などもなくなして、境にて子産みたりしかば、はなれて別にのぼる。いと恋しければいかまほしく思ふに、せうとなる人抱きてゐていきたり。みな人は、かりそめのかりやなどいへど、風すくまじくひきわたしなどしたるに、これは男なども添はねば、いと手はなちにあらあらしげにて、苦といふものを一重うちふきたれば、月残りなくさし入りたるに、紅のきぬ上に着て、うちなやみて臥したる、月かげさやうの人にはこよなくすきて、いと白く清げにて、めづ

ふとゐ川　太井川または太日川と書いた。今の江戸川の下流の古い名。この川を下総と武蔵との国境にあると書いているのは作者の記憶ちがい。

まつさと　今の千葉県松戸市か。

せうとなる人　作者の兄、菅原定義をさす。

ひきわたし　幕などを引くこと。

苫　菅・茅などを菰のように編んだもの。家の周囲や屋根などを覆うのに用いる。

らしと思ひてかきなでつつ、うち泣くを、いとあはれに見すてがたく思へど、いそぎゐていかるるここち、いとあかずわりなし。おもかげにおぼえて悲しければ、月の興もおぼえず、くんじふしぬ。

つとめて、舟に車かきすゑて渡して、あなたの岸に車ひき立てて、おくりに来つる人々、これよりみなかへりぬ。のぼるはとまりなどして行き別るるほど、行くもとまるも、みな泣きなどす。をさなごこちにもあはれに見ゆ。

〔研　究〕

一　「これ」は男なども添はねば」の「これ」とは何をさすか。

※二　「うちなやみて臥したる、月かげさやうの人にはこよなくすきて」はいろいろに解される。どのように解するのがよいか、次のことを参考にして、考えよ。

①　(ア)読点（・）を「臥したる」のあとにおくか、(イ)「月かげ」のあとにおくか。

②　「月かげ」は、(ウ)「月の光」という意か、(エ)「月光に照らされた姿」という意か。

③　「すきて」は、(オ)「透きて」か、(カ)「過ぎて」か。また、「透きて」として

車ひき立てて　車の轅を榻にかけておくことを「立つ」という。

重要語句

○つとめて　○かつがつ　●産みたりし　○かば　●いかまほし　○せうと　○ある（ゐていきたり）　○みな人　●風すくまじく　○月かげ　○めづらし　○あかず　○わりなし　○くんず

解答欄